
ical Girl Lyrical Nanoha StrikerS [**全てを撃ち抜く者**]

スマイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Magical Girl Lyrical NANOHA
Strikers 「全てを撃ち抜く者」

【Nコード】

N8977Y

【作者名】

スマイル

【あらすじ】

『魔法少女リリカルなのはStrikers』の二次小説。
主に主人公視点で展開されますので、単調になるやもしれませんが
ご容赦下さい。

飄々とした人……。

それでいて、何だか頼もしい人。

だけどそれだけじゃなくて…一緒に居ると、楽しい。あの人と同じ場所でも過ごせる。

あの人の言葉で、また立ち上げれる。あの人の笑顔で…私達は、闘える。

……『魔法少女リリカルなのはStrikers』「全てを撃ち抜く者」、始まります。

第1話 全てを、撃ち抜く（前書き）

第一話、スタートです。

思い出したように描いていますので、多少のキャラの食い違いはご了承ください。

第1話 全てを、撃ち抜く

忘れないで……

アナタは、独りじゃないの。

憶えていて。

私の名前を……。

0075/04/03 AM 06:00

朝。

目が覚めると、いつも見ている天井。無機質の白い天井……。でも視界に違和感がある。

そう、俺は今泣いている。不可解でいて絶望的な夢を見ていた訳ではない。それとは逆に、何だか…懐かしいような。

「つたく…何だつてんだ」

泣き腫らした目を涙と共に拭いながら上体を起こす。寝相は良いほうだし、身体に倦怠感はない。そういや、昨日は晩飯と風呂を早々に済ませてから泥のように眠ったのだけは覚えている。

大抵、人は寝ている間に、その日の出来事を整理しながら眠っていると言われている。そして、その時の感情や言葉、それらを反映して現れるのが『夢』だ。

「夢で泣くつても…何だかおかしいよな」

《お早うございます。ミスター》

俺の独り言に答えるかのように、真っ白なベッドルームに無機質な言葉が聞こえてくる。勿論、周囲に人影は無い。聞こえてくるのはベッドの脇にあるデスクのインターホンからだ。

「お早う、『ジーニイ』。寝ている間に何かあったか?」

《いえ、特には何も。昨夜未明にビデオメールを一件、受信致しました》

そのインターホンに映るミニチュアの執事こそがこの家のセキュリティAI、『ジーニイ』だ。親父が何年もかけて作ったソレは、最早俺にとっては家族同然。

「誰からだ?」

《管理局地上部隊、108部隊々長、ゲンヤ・ナカジマ様からです》

うう、あの人がよ……寝ている隙に将棋や囲碁の勝負でも持ちかけてきたのか? 勘弁してくれよ、ただでさえ娘さんが相手出来ないからって、若い力も捕まえてまでやるなよ、大人気ない。

《いかがいたしますか?》

「朝食が済んでから読む。その間にアドレス照合と、ウイルスチェックをしといてくれ」

《かしこまりました。ミスター》

簡単なトーストだけで朝食を終えると、制服に身を包む。流石にAIにまで料理してもらおうなんて甘い考えは無い。親父だって、家事だけは人の手でやるものだ、って言ってたしな。ネクタイを締め終わったところに丁度、空間ディスプレイが現れ、ミニチュアの執事が姿を見せる。

《ミスター。照合、及びチェックに問題はありませんでした》

「オーライ。メールを開いてくれ」

《かしこまりました》

そこに現れたのは、白髪の厳ついオッサン……もとい、俺の上司にして部隊長のゲンヤさんだ。

『おう。いきなりで悪いな。実はなあ、退勤するときに言い忘れてたんだが…お前に出向辞令が来てな。出勤後でかまわんから、俺の部屋に来てくれ。あ、あと……ギンガにも辞令が来てっから、出来れば二人揃って来て欲しい。じゃ、頼んだぜ』

頼んだ、つつたって……俺、アイツの連絡先知らないんだけど…

『追伸。明日の朝、ギンガがお前の家に行くよ。住所も伝える』

おい、オッサン。余計な事すんなや。

そんな心のツツコミをかき消すように、ドアホンが鳴らされる。しかも間髪入れずに二回も。

《ミスター。お客様がお見えですよ》

「誰だ？つて、聞くだけ無駄か…ギンガだろ？」

そのディスプレイの上に投影された映像はドアホンについているカメラからの映像。

おい、お嬢さん。鏡代わりに使うな。バレバレだぞ？

「つたく、行動だけは早いな……玄関のロックを解除してくれ」

《かしこまりました》

身支度は既に終わってるのでそのままお出迎えに。自室を出て左がそのまま玄関に繋がっているので部屋を出ればすぐ解る。紺色に近い青い髪に紺のリボン。女性局員の制服に身を包んだその女性こそ、あのオッサンの娘、

「あのー、こ「ホントに来たのかよー等陸曹」あ、良かった…間違えてたらどうしようって…」

「だったらドアホン使って呼べばいいだろうに…面倒な」

本当にお淑やかだよな。どっかの妹にも教えてあげたい。今はいいけどな。

「そーい、俺の家に来たのって初めてか。つか、時間無いのか？」

「いえ、まだ一時間ぐらいあるかな？」

一時間……一時間……！？

「悪いけど、割と急ぐ」

駆け足でさっきの部屋に戻り、必要なものをポケットに突っ込んでまた戻ってくる。そしてギンガの脇をすり抜けて車へ。

持つてる車は『ランチア・ストラトス』。違う世界で買ったのにミッドで動くのは何故？って考えてる場合じゃない！

「ちよつと、どうしたの！？」

「お前、こっちの方が隊舎から遠いの解ってて来たんじゃないのか？」

エンジンに火を入れ、サイドウィンドウから顔を出した俺には全く考えてないような顔に見える。やっぱ解ってないみたい。ガレージから車を出すと、門の前で助手席側のドアを開ける。

「乗ってけ。ちよつと飛ばすけど」

「あ……安全運転で、お願いします」

失敬な。

これでもこれに乗って四年経つが、切符切られたことも事故ったことも一度も無い。とはいえ、本当にちょっと飛ばさないとかなりヤバいな。

胸ポケットから携帯端末を出すと、電話番号とは違う十桁の数字にリダイヤル。その番号は『ジーニィ』へ直接繋がる。

《お呼びでしょうか？》

「玄関のロックよろしく。あと、家全体を省電力モードに切り替え」

《かしこまりました。いつてらっしゃいませ、ミスター》

ギンガが乗り込んだところで、颯爽と住宅街を駆け抜ける。これでガス満タンだったら数分で着くぞ？

「やっと来たか。規定時間の一分前だな」

車を降りてそのまま走って隊長室へ向かった所為か、凄く息が切れてる。それより気になるのは……隣のコイツ。あんだけ走って呼吸

乱れてないとか無いだろ？

「ったく。人の事は言えんが、ちよつとは運動しろよ？」

「そつくり、そ、そのまま、お返ししますよ…隊長……はあ」

「大丈夫？少し休む？」

今更優しく接するな。後で十億万土に送ってやろうか……ま、いいや。ようやく呼吸も整ってきたし。

「では改めて……108部隊地上機動隊所属、ライル・ディラン
デュー一等陸曹」

「同じく、ギンガ・ナカジマー一等陸曹」

「「現時刻を以って、部隊長室へ出向致しました」」

最後の復唱だけ合わせて敬礼すると、隊長も俺たちに倣って敬礼を返す。

「うむ。いきなりで申し訳なかったな。実は事前に話した通り、二人にはある部隊へ出向することに決まった。異動時期は今日から二週間後だ。何か質問は？あ、あと、肩肘張るな。もう姿勢崩していいぞ」

「で、俺は何処へ異動なンスか？まさか管理外世界へ、なんて……」

「馬鹿。おめえだけじゃねえよ……二人揃って、だ」

「「はい？」」

鳩が豆鉄砲喰らった様な顔をしている俺たちの前に一つの資料を放って見せる。部隊名『時空管理局本局・遺失物調査部 機動六課』の資料だ。

「父さん…ここって確か…」

「ああ。先日新設されたばかりなんだが……集めたのがヒヨッコ共ばかりでベテランが数人しかない。っと、部隊長とその騎士さん達はこの道十年のベテランだったな……兎に角、戦闘訓練や各方面への調査に人手が欲しいんだと。ったく、こういう時だけ人をこき使いやがって…あのタヌキ娘は」

最後は思いつきり愚痴だったけど、異動の理由としては充分だ。けど、

「なあ、オッサン。俺はいつとくけど戦闘訓練はからきしだぜ？ポジションがポジションだからな」

そう。俺の今のポジションは『センターガード』。加えて狙撃能力を買われ、『スナイパー』のポジションにも移行できる数少ない人材。それを容易く異動に出していいのか？

「安心しろ。お前は捜査資格も持つてるし、事務能力もある。当面は周りのサポートってトコだ。それに、この部隊は一年間の試験運用って事で設立されてる。そこから先のことはいい。戻ってくるなり、行きたい所に行くなり好きにしろ」

好きにしろって……隊を預かる人間の言葉かよ？でも、疑問は諸々ある。

まずは、試用期間だ。一年ってのは長いようで短い。加えてこの資料の中に目立った人員は部隊長に分隊長クラスだけ。残ってるのは卒業したてのペーパーか、あるいは以前いた隊から引き抜かれたのか。

それに……このランク。部隊内で保有できる高ランク保持者の人数は決められている。それにいくら手を変え品を変えとやった所で、最悪問題を起こせば即解散だ。危ない綱渡りをしている部隊だな。

「ねえ、父さん。スバルの名前が……」

「ん？ああ、アイツも大抜擢されたようだな……親としては鼻が高いが、局員としてはまだまだだな」

スバル……スバル・ナカジマか？

「知ってるの？」

「一週間前までいた本局武装隊の特別講習の手伝いで同じ名前を聞いたな……確かもう一人は、ティアナ・ランスター、だったか？」

「ティアナも？」

「知ってるのか？二人共Bランクへの昇格試験を落ちて講習に来てたけど」

それを聞いた瞬間、二人に黒いオーラが見え始める。ちょ、何か……マズいこと言ったかな？

「父さん……夜にはスバルを呼んで家族会議を開きましょう」

「そうだな。アイツは何かにつけて、都合が悪いと連絡をよこさんからな……」

あゝ……俺は知らん。てか、原因はそのスバルってヤツが落ちたんであって、言った俺には非は無い。

その後、落ち着いた隊長から、仕事の引継ぎや荷物整理をしろ、との指示でオフィスへ戻る。

「なあ、お前の妹って……そんな抜けてんのか？」

隊舎の廊下。その道中に俺は気付いてしまった。もしかして、この家族はちよつと不思議な家族では？かといってストレートに聞く奴は、その女性局員に殴られて下さい。病院行きは保障出来かねますが……

「抜けてる、っていうか……おつちよこちよいなところが少し……いえ、結構……多々」

一体どれだよ？そこまでになるまで思い出されるのか……聞き方マズったかな？

「言い辛いならいい……お前の妹とランスターとお前は知り合いか？」

「ええ。あの子が訓練校に入学してからの付き合いだから、もう三年ね」

「意外と長いな……ま、それでも助かるんじゃないか？知らない

奴等ばかりよりかは」

「しかも妹のいる部隊に行くなんて…偶然って怖いわ」

いや、俺にとってはお前が怖い。特にお説教とか、お説教とか、お説教とか。

「何を考えたのかな？」

「いや、何も」

言い切ればコイツも諦めるだろ？無駄に言い訳を考えるからそれも含めて説教されるんだ。止めた方が良い。本当に。

「ま、それまでの間に資料に目を通して、仕事の引継ぎと荷物整理もしっかりして」

「自分の体調管理とデバイスのメンテも欠かさずに……」

「「しっかりと仕事をしましょう」」

何でかこいつとは息が合うな……てか、初対面からこんなに息が合うものなのか？と隊長も首を傾げてたな……ま、あと二週間。しっかりとやりましょうか。

「それまでの間もよろしくですよ、ライルさん」

「オーライ」

向き合わずただグータッチを交わす。コイツの身内が変わってるな

ら、俺も変わり者だな。
なんて冗談にもならないことを考えながら二週間のスケジュールを
頭の中で整理する。

ああ、これから二週間が大変だ。

その日の夜。

一人帰宅したライルに一通のメールが届く。差出人は居候している
一人の男からだ。あまり顔を出さないその居候からのメールに嘆息
すると内容に目を通す。

『やあ。毎度毎度メールだけですまない……実は長期任務を言い
渡されて帰れそうに無い。戻ってくるのは最低でも一、二週間はか
かりそうだ。音声入力はそのままにしておいてくれて良い。別に二
度と帰って来れない訳じゃないから……土産は、要らないか。余
計な荷物が増えるだけだし。一応それだけだ、じゃあな。二週間後
にまた会おう』

（まったく…律儀なヤツだ。そんな事で連絡するなって）

一年前からいつもこんな感じにメールが来ては、ふらつと帰ってき
てまた任務に行く。そんな生活ばかりなので流石にライルも呆れて
いる。居候にしてはいつも家を空けている。

「ま、海の方は然程心配しなくて良いか。凱の事だし、いつも通
りに来るだろ……」

差出人……凱の役職は航空機動隊長。の癖に時空管理局の中ではデ
スクワークに翻弄されっぱなしで教導すらも出れないとか。しかも
海を毛嫌いしてるレジアス中將のお陰でなかなか陸上本部に報告内
容を突っぱねられているので頭を抱えているようだ。

「管理外世界でもない限り、帰っては………」

刹那、背中になにか衝撃を受けた。

正確には誰かがぶつかったような感覚だった。それだけじゃない。
何故か後ろを振り向けない……後ろではフードを被った『誰か』が、
ライルの背中から……刺していた。

刺しているだけじゃない。その凶器はライルの胸まで貫いていたの
だ。振り向けない違和感の正体はこれだった。その切り口からは制
服を滲ませる様にして血が流れ出る。胸一面を赤く染めたところで、
フードの人物はその凶器を思いつき引き抜く。

「が……っ!!」

引き抜かれた拍子に、前のめりに倒れそうな身体を必死で踏ん張る
が、よろめきながらもその人物を正面に見据える。

「てめえ……何者だ？」

「……………」

「だんまりかよ……………だったら、力づくで！！！」

デバイスを展開しようとした瞬間、前に突き出したライルの右腕を、フードの人物は払うようにして切り落とす。肘から先を失った腕からは夥しい量の血が吹き出る。その量は既に致死量に達するほどだ。

「くそつたれ…！」

護身用のナイフを取ろうとするも、そのまま腹部を刺され、こちらも身体を貫通するほど、膝から崩れ落ちる。玄関のタイルを赤く染め上げ、意識が朦朧とする中、倒れた拍子に胸ポケットからある物が出てきた。

くそつ！血が止まらねえ……………目も霞んで来やがった。ここまでのされたんじゃないあ、もう……………動けねえか。

(……………?)

何だ？……………ああ、そうか。何時かは渡そうと思ってたんだっけ……………

…いつも肝心な時に忘れてんだよなあ。

ポケットから出てきたのは、紫の宝石をはめ込んだ安物の指輪。買ってから二週間経つけど…渡せないままだったっけ。しかもご丁寧に指輪に言葉まで彫ってもらって…ホント、タイミング悪いよなあ。

（そういやあ…ギンガの、誕生日って…何時だったかなあ？そんな時に渡すか…）

そこで俺の意識は暗くなり……

ライル・ディランディは……日付が変わる直前、その命の灯火が…消えた。

第1話 全てを、撃ち抜く（後書き）

次回「再会と…約束」

感想・及びご指摘ありましたらお願いします。

第2話 再会と…約束（前書き）

いきなり一話で人殺しちゃいました。楽しみにしていた皆さんには大変申し訳ございません……

では、第二話をご覧ください。

第2話 再会と…約束

0075 / 04 / 04 AM 08 : 18

「え？……父さん、今何て？」

「もう一度言う。ついさっき、ライル・ディランディー等陸曹の死亡の報せが来た。場所は自宅前の玄関。事故ではなく、何者かに殺害されたようだ」

何で？…何でライルさんが死んだの？

今聞かされた事に、私の頭は全く動かない。思考が止まったのか、あるいは真っ白になってしまったのか……でも、考えていることは一つだけある。

何故、あんな人の良いライルさんが……殺されるの？

「俺としても信じられんが、今居候している人物から事情を聞くところだ。そいつも管理局に勤めているが、今は別の任務ですぐには戻って来れそうにない。よって、今は局員が現場検証に当たってる」

そんな言葉なんて頭に入ってこない。ただただ平然と彼の死に疑問ばかりがグルグル周り続けている。理由は？誰が？何の為に？考えるのはそんな在り来たりな事ばかりで、特別に何か知っている訳でもなかった。でも、一つだけ言える。

あの人は、誰かに恨まれるようなことは、一つもしていない。

訓練校に入って数ヶ月してから出来た、唯一の異性の友達。いつも飄々としていて、人の揚げ足ばかり取っていたけど、それでも彼の技能には目を見張るものがあつた。

「ギンガ？……おい、ギンガ！！！！？」

彼との思い出が走馬灯のように浮かんでは消え、その流れが急激に速くなった所で、私はその場で意識を失った。

0 0 7 5 / 0 4 / 0 6 P M 1 3 : 1 1

無事に葬儀を終え、それぞれの思い出話に華を咲かせていた面々の中に、一人の長髪の男がライルの墓の前で一人、黙祷を続けていた。その男こそが、彼の居候にして親友『十六夜 凱』航空機動隊長。中には突然の死に涙を流す者、訓練校時代の思い出に笑う者、それぞれがライルとの思い出ばかりだ。そんな中、凱だけは違った。彼の死を受け止め、ある『約束』を果たす為に黙祷を捧げていた。

「十六夜さん……」

不意に声をかけられると、そこには目を真っ赤に腫らしたギンガだった。彼女もライルの死に嘆き、部隊の一員として、葬儀に参加していた。ちなみにゲンヤは機動六課へ向かい、部隊員の補充調整に追われている。

「ギンガ……久しぶり」

「はい……お久しぶり、です……」

どこか歯切れの悪いギンガ。逆に笑顔を作ろうとしてる凱もまた、どこか無理をしているようだった。

「大丈夫か？何か飲み物でも……」

「いえ……結構です」

「そうか。それと……ちょっといいか？」

俺としては見ていられなかった。あんなにギンガが力弱く言葉を返してくるのが……とても儚く思えてしまった。いつもハキハキとしていた彼女とはとても違っていたのだから。

共同墓地に近いカフェ。そこで向かい合うように座っている俺とギンガ。俺の前には紅茶があり、彼女の前にはお冷だけ……どうしても伝えなければいけない事があったからだ。

「悪いな。無理矢理こんな所へ……」

「良いんです……それより、お話って？」

俺が切り出すはずの言葉を紡ぎ出すように聞くと、俺はポケットから指輪を取り出し、ギンガに差し出す。

「……？これは……」

「ライルの傍に落ちてた物らしい……多分だけど、キミに渡そうとしてたんじゃないかと思って」

彼女の手にもその指輪をのせると、指輪の裏にある言葉が彫られているのに気付く。そこには……

『君と共に、この先も寄り添い、二人で歩いて行きたい』

その言葉を理解したギンガの目からは、ポロポロと涙が零れ落ちる。彼に近かったギンガにとって、友人であり、気の許せる異性だっただろう。でも、それでも踏み込んではいけない場所があるのは解っていて一歩引いて見ていたに違いない。それがこんな形で、こんな時に解ってしまった。

「気休めかもしれないけど…アイツは君を…「解って…います」え？」

「彼の気持ち…でも、それを、今まで知らない振りして…ずっと…っ！解っていたのに…彼の事…もっと、知りたいって…思ってたのに…っ…！！」

途切れ途切れでも、俺には解った。彼女もまた、彼の事を…でも、俺が知って良い事じゃない。知ってしまったえば…彼女の決めた事を不意にってしまうかもしれないから。

「それで良いんだ…知ろうと思った、知りたいと願った。それだけでも…お互いに歩み寄れる」

「…十六夜、さん……」

「だから、忘れないで欲しい。アイツが、自分の人生を分けて良いと願った事だけは…」

「はい……はい！！」

涙を拭って見せた笑顔は、もういつも通りのギンガ・ナカジマだった。アイツも、それを願っていたんじゃないだろうか…本人はいなくても、親友だった俺にも解らない…でも誰だって、人の幸せを願

わない奴は、絶対居ないだろう…

（お前も……そうだよな？）

二人で青い空を見上げ、突然いなくなった友を思い出す。けど、俺達はもう泣かない。お前が居た事が……お前とともに居た事こそが、お前の生きた証だ。

0 0 7 5 / 0 4 / 0 6 P M 1 6 : 0 7

すっかり夕方か……最近日は伸びるのが早いな。春になったらばかりなのに…。

隣にはまだ目を赤くしているギンガ。ご都合的かもしれないが、彼女を送っていつてる最中だ。別にそこにつけこんで何かしようって訳じゃなくて、ただ…友達として、だ。

「そっいえば」

「ん？」

「『アレ』…覚えてます？」

『アレ』…ああ、

「憶えているさ。何せ、俺が考えたんだから」

「やる方は結構恥ずかしいんですよ？ライルさんもやりたくない
っていつも言っていましたし」

「そうかな？俺としては全く恥ずかしくないけど…人それぞれなの
か？」

「でも、何か元気になるだろ？」

「うっ…それは否定出来ません」

「だろ？だったら久々にやってみるか」

「はい！！？」

「ってお嬢さん、そんな顔赤くするな。恥ずかしいのは解るけど。」

「なら、俺からは…『アイツの分まで生きて、絶対に危険な任
務でも生き延びる』」

「ちょ、ちょっと…はあ、判りました。私は『あの人の分まで精
一杯、どんな時でも笑顔を絶やさずに生きていきます』」

「お互いに向かい合って、それぞれの目標を言ったところで、拳を胸
の前に掲げて…絶対に破らないように、自分の決めた道を外れな

いように…誓った。

「『『勇気ある…誓いと共に』」

0075/04/09 AM10:22

『お前、本気か!?』

「ええ、決めました。既に転属希望書も提出してあります」

『つて言っただって、解散後はどうするんだ!?』

「前から誘われていた戦技教導隊に行こうかと思ってます」

あの誓いから三日後、俺はある事を伝えるためにゲンヤさんに通信を入れていた。今俺は自分の執務室に居る。希望書はすでに提出済み。もう戻れない。

『で、それはアイツの代わりについて事で良いのか?』

「新人ばかりだけど、だからこそ俺が教えられる事があるかもしれないんです。それを教えて、あの人達を守っていく事が…俺の役

目です」

『はあ……解ったよ、もう止めねえ。けど、一つだけ聞かせる?』

「はい」

『アイツは……今までの人生が、充実してたと思うか?』

それは………

「はい。アイツは……自分の生きた証を残してくれました。それが消えない限りは……アイツはまだ、生きています」

『そうか……向こうの隊長にはお前の事を伝えておく。後一週間は荷物整理でもしておけよ』

「はい」

そこで通信を終えると、デスクの隅にある写真立てに目をやる。そこには訓練校を卒業するときの写真と、それぞれの部隊に配属されるときの写真があった。そこには言い尽くせないほどの思い出や馬鹿話が沢山詰まっている。

「お前の生きた証……しっかりと立ててやるからな。ライル」

0075 / 04 / 17 AM 08 : 25

やって来た機動六課。ギンガとは一日遅れではあるが、隊舎には無事到着。結構綺麗だな…新設されただけあって施設の使い回しではなさそうだ。海の近くから轟音が響いてるけど、訓練中かな？ま、すぐには挨拶できないから後回しでも良いか…フロントランクから自分の荷物を取り出すとそれを背中に担ぎ、正面玄関に向かう。俺の愛車『ロータス・ヨーロッパスシャル』。ライルや他の友人からは『お前がそんな車は似合わない』って言われるけど、良いじゃないか。デリケートなのは否定しないけど良い車だろ？

玄関の前には、身長(?)数十センチの少女がフワフワと浮いている。恐らくお出迎えなんだろうけど…制服着てるから職員だろうな。こっちに気付くと大きく手を振って出迎えてくれる。

「お待ちしてましたです！貴方が応援に来てくれた魔導師さんですネ？」

妙に丁寧な言葉だな…しっかりしてる子だ。水色の髪に一房だけ交差するようにまとめられたリボンが印象的な小さな女の子。階級章からすると、俺より下かな？

「ああ。『十六夜 凱』一等空尉、現時刻を以って機動六課に到着・着任致します」

「はい。私は機動六課課長補佐『ラインフォース？(ツヴァイ)』空曹長です。到着を確認致しましたです。ようこそ、機動六課へ」

お互いに敬礼を済ませると、そのまま課長室へ。一番上の階かと思っただけ、中央辺りの階に位置する部屋に通された。その部屋の中に居たのは茶色の髪に、ラインフォースと同じように髪をまとめた女性がデスクに腰掛けていた。

「お、ライン。お客さんか？」

「はい。今日から着任の応援さんです」

どうやら旧知の仲のようだ。でも、妙に砕けた感じで接している辺り、身内か何かだろう。

「そうや、今日やったっけ？随分と早かったな」

「私もビックリです。では、ご挨拶をお願いします」

「はい、本日より時空管理局本局・遺失物調査部『機動六課』に入課致します航空機動隊々長『十六夜 凱』一等空尉であります。よろしく願います」

「…はい、この機動六課の部隊長にして課長の『八神はやて』二等陸佐です。六課一同に代わって歓迎いたします」

俺の堅い敬礼とは違い、挨拶のように軽い敬礼で返してくる八神さん。この人は階級に拘りは無いのかな……さっきの娘のように砕けた感じで話しかけてくる辺り、気にしない性分みたいだ。

「でもビックリやわ。まさか応援に来てくれる人が、あの『勇者』とは思わへんかったからな」

「リインもビックリです！こんな形でお会いできるなんて思っ
てませんでしたから」

『勇者』…………それが俺の二つ名、というよりは異名か。曰く、ど
んな逆境でも自分、ひいては周りの隊員を奮い立たせ、それを誇示
せず士気と戦果を上げている事からその異名が付いた、らしい。

「そんな…………俺に『勇者』なんて、似合いませんよ？ただ、皆を
奮い立たせる為にそうしてるだけです」

「うゝん、何か堅いなあ…………もうちょい砕けた感じでも気にせえ
へんよ？身内ばかりで固めたような部隊やから」

「リインもリインって呼んでくれて良いですよ」

でもなあ…………ま、いいか。締めるところは締めれば良いだけだしな。
何か、流されてばっかのような…………

「解ったよ、リイン」

「…………はいです！」

「ちなみに部隊長はどう呼べば？」

「はやてちゃんはやてちゃんが良いですよ？」

「いや、流石にソレはちょっと…………じゃあ、八神。よろしく」

「イマイチやけど、まあええわ。よろしくな、十六夜さん」

握手。その上にリンも手を乗せるがサイズが合っていない所為かその握手している上に立っているような形になった。これで、入隊式は終了かな？

その後、隊舎を案内してくれる八神には申し訳なかった。新設したばかりで書類整理もあるのに態々案内してくれるなんて……有難過ぎる。

「そういえば…ご友人は、残念でしたね」

やっぱり知ってるのか…やっぱりゲンヤさんを知っているだけあってその情報は聞いているらしい。

「良いですよ。何時までもクヨクヨしてられないですし……」

「そうやけど……あ」

丁度正面玄関に着いたとき、向かってくる団体に気付く。それは…死屍累々と呼んだほうが良いのだろうか……少年少女のボロボロの姿に、白い制服に身を包んだサイドポニーの女性。成程、さっきの轟音の正体はあの子達か。

「なのはちゃん。訓練お疲れ様や」

「あ、はやてちゃん。今日の朝練は終わったよ……って、そちらの方は？」

そこでやっと俺に気付く。てか、自分で言うのも何だけど、180

近くの腰まである長髪の男に気付かないのもどうかと思うな。

「あ、この人は「十六夜さん！」…お、ギンガ」

紹介される前に、制服姿のギンガがこちに向かってくる。大きく振っている右手の薬指には、ライルの形見の指輪が光っている。

「今日だっただんですね。着任」

「ああ、ギンガも元気そうだな」

「ええ、お陰様で」

「ギン姉、知り合い？」

ギンガと同じような顔立ちの女の子が聞いてくる。そういえば、妹…だっけ？ ホント、似てるな。

「ええ、訓練校時代からの知り合いで十六夜凱さん。今は一等空尉で航空機動隊の部隊長さん」

「で、今日から機動六課に配属ってワケだ。皆、宜しくな」

「…はい、宜しくお願いします！」「…」

軽く敬礼して見せるけど、階級聞いた途端に堅くなったなあ…：年下だし仕方ないか。でも、あんな小さい子まで戦列に入るのか。

「あの…十六夜一尉ってもしかして、あの？」

「そ、『勇者』サマや」

「やっぱり……」

だから、その勇者ってやめてくれ。ただでさえ恥ずかしいんだ。

「どうしたの？ティアナ…難しい顔して」

ティアナと呼ばれたオレンジ色の髪の子は怪訝そうにこちらを見ている。

「いえ、女性に人気のある男性局員のランキングで1位だったの
で…」

ってどこにある！！？その雑誌。

「へえ、そうなんだ……十六夜さんがねえ…」

「こっちは初めて聞いたぞ？ギンガ、何だよその顔は」

「いいえ、何でもありませんよ……随分とモテるんだなあ、って
思っただけです」

本当にビックリだ……そんな雑誌の記事があつたなんて。

「まあ、それはともかくとして……十六夜さんにはなのはちゃん
と、ロングアーチの皆のサポートに周って貰うんで、よろしくな」

「はい、宜しく願いますね。十六夜一尉」

「こちらこそ。それより階級が同じなんだ、堅苦しいのは無しだぜ？高町さん」

「なのは、でいいですよ」

「じゃあ、こっちも凱でいいぜ。改めてよろしく」

「はい！」

元氣一杯の笑顔で握手を求めてくる。それに応えようと、何だかこっちまで元氣になりそうなほどの笑顔を向けてくる。成程、彼女の力リスマ性も中々……。

その後も各所の挨拶回りを終え、食事に入ったのは1時過ぎあたりだった。まさか、これがドタバタの始まりになろうとは……

第2話 再会と…約束（後書き）

ご都合主義、申し訳ありません。ですが、流れとしては納得していただけたと思っています。

次回、第三話。『約束と、集結』

第3話 約束と、集結（前書き）

感想にて、前話の内容にて階級に関する訂正箇所が見つかりました。

訂正の方は済んでいるので問題ありません。 ほぼ思い出しながらの投稿なので、至らない点がございましたら気兼ねなくお願いするとともに、指摘して頂いた方には、この場を借りてお礼を申し上げます。

それでは第3話、ご覧下さい。

第3話 約束と、集結

0075/04/10 AM 11:32

SIDE OF ティアナ

あの人に来てから翌日、私達フォワード陣はデスクワークの真っ最中。訓練に続いてこっちでも揉まれまくってるけど、苦しくは無い。私には執務官になるという目標があるんだから。でも、隣の馬鹿は既にグロッキー……助けないわよ？これやらなきゃ次の訓練に差し支えるんだから。

そう考えながらも自分の分はもう終わってるし、チビ達のフォローでも入ろうかな……と思ったけど、大丈夫そうね。年齢が年齢なので簡単な表計算だけの書類をまとめる。一応、カートリッジとかの消耗品の発注表っていう大事なものだけど、数字の入力だし苦労はしないでしょ。

ってことで、何しようかな……っと、そうだ。

私は管理局の人事データにアクセスして、彼の経歴を呼び出す。

（『十六夜 凱』……二十歳。階級は一等空尉。管理局航空機動隊々長にして、本局航空艦隊機動大隊副隊長。0069年入局。訓練校からの三年間、小隊内での的確な指揮能力と戦闘能力により常に成績上位をキープ。卒業時の魔導師ランクはA+。入局後の半年間は航空艦隊機動大隊に配属。上司への助言と戦略提示により、僅か一年で同大隊の副隊長に就任。その後、管理局地上部隊内、自身

が隊長を勤める航空機動隊を発足。現在は教導資格取得の為、戦線を離れている)

凄い……副隊長になるのだって十年は同じ部署に居ないとなれないのに、たった一年なんて。しかも自分の力で機動隊まで作るんだから……この人の知能指数幾つよ!?

「あれ?」

(なお、当該の出自については特記事項に抵触するため削除……自身もその経緯については事務報告を拒否)

「どうしたの? ティアナ」

「っ!! な、なのはさん!!?」

S I D E O U T

S I D E O F なのは

ふう、これで終わりつと。訓練メニューも作ったし、今後は基礎と応用の反復が主、かな。でも……、

頭から煙を出してるスバル。

あたふたしながらキーボードを操作するキャロ。

数字を間違えたところで書類と睨めっこしてるエリオ。

一人余裕で自分の分を終えたティアナ。

うーん、一長一短つてところかな？でも流石ティアナ。こういうデスクワークでもやつぱり早いね。でも、協力してもいいはずなんだけどなあ。考えがあるって事で良いか……

「あれ？」

ん？何かティアナの様子が……何処か間違えたのかな？
まあ、簡単なのを選んで渡したんだけど……私、ミスったのかな？
ティアナのデスクまで行くと、横から声をかける。

「どうしたの？ティアナ」

「っ！…な、なのはさん！…!?」

何か、ちよつと傷ついた……まるで幽霊に会ったような声で驚かれました。

「そんなに驚かなくても……あれ？これって凱さんの経歴……」

「いえ、その……気になった、というか」

まあ、私も気にはなってますけど。っていうか、指揮能力Sクラス

て部隊長レベルだと思うんだけど……。階級と能力値が釣り合っていないのもその一つ。

「希少能力レアスキルなんて持つてなくても、ちゃんと出来るってお手本だよね。ティアナには見本にして欲しい人だと思うな」

実際、フォワード内での指揮はティアナ自身にかかってるんだし……良い機会だからマンツーマンでやらせてみようかな。

「なのはさん！」

「あ、噂をすれば、だね」

S I D E O U T

S I D E O F 凱

「なのはさん！」

「あ、噂をすれば、だね」

ん？何の噂なんだろ？話に入るとややこしくなりそうなので用件だけでも良いか。

「さつき見た教導内容なんだけど、ちょっと良いかな？」

「うん、良いよ」

「ちょっと疑問なんだけど…」

要は訓練内容の密度だ。見た限りだと、ちょっと戦闘訓練に時間をかけすぎではないだろうか、という疑問からだ。

デスクワークは基本的にそれらが済み次第なのだろうけど、簡単な書類製作だけでも教えてはどうだろうか……。よくよく考えると、デスクワークの内容はそれ程大事な内容でない限りは教えなくてもいいだろうけど、それぞれの進路を考慮しても大事では？

「うーん、たしかにそうだけど……。ここではフォワードとしての活動が第一だからこのままでいいんじゃないかな？」

「かといってもクールダウンがたった数分っていうのもいかなものか、と考えているけど……」

なのはさんと共に頭を悩ませてはいるが、実は今相談しているのは来週分のスケジュールだ。もう今週分は提出済みなので訂正箇所の確認で俺が駆り出されている。

「それじゃあ、午後にでもその相談しようか？今日は朝練だけだし、午後はこっちに時間回すし」

「了解。なら、俺はこれからシャリオのところに顔を出してくるよ」

「あれ？何か呼び出し？」

「いや、デバイスの細かい設定をお願いしようか・と」

使ってるのはストレージタイプだが使い方が荒っぽい所為か、すぐにメモリがフリーズしてしまう。流石に並列処理にしてあるのがいけないのだろうか。

「そっか……ならお昼からでも煮詰め直そ？まだ提出には時間あるし」

そうだな……俺自身も今のところ頼まれている事は無いし。

「サポートが役割だからな。お安い御用だ」

そして、昼。

食後のお茶の最中、何やらフォワード陣のテーブルが騒がしい。見る限りでは食事は終わってるようで、デスクワークに関しての話し合いだろうか……そういえばさっき、八神があんのテーブルに行つて話をしていたのは見ていたけど……それと何か関係があるのか？

「何だ？楽しそうだな…」

テーブルの席に居るスバルの肩に手をやると、話に割って入る。八神と話した後の彼女達の表情は何だか期待と不安が隣り合わせの様な感じだった。

「いえ、実は……」

「明日から出張任務になるそうです」

キャロ、エリオがそれぞれ話された内容を告げていく。何でも、管理外世界にて『ロストロギア』の搜索任務を行うそうだ。そして、その管理外世界というのは…

「第97管理外世界、だそうです…ご存知ですか？」

「もしかしてそれって、地球のことか？」

「「知ってるんですか!?!」」

「ああ、何せ俺の生まれ故郷だからな」

「「「はい?」「」「」」

皆目が点になってる…そういえば知らないんだっけ。というより、話してなかったな。

「凱は私達と同じで、地球出身者なんだよ」

「オメーラが知らねえのも無理ないさ。コイツの経歴事項にはそ

スバル、それは子供の考えです。いい大人が - といっても二十歳だけど - 故郷に帰るのに仕事持っていてどうする？なんて考えは止めよう。相手は十五歳の女の子だ。

「おいおい、俺だって行きたいけど…流石に公私混同したくは無
いさ」

「駄目よ、スバル。十六夜さんだって仕事があるんだから」

押され気味な会話に入ってきたのはやっぱりギンガ。こういう時だけは味方してくれるんだよな…

「だってギン姉、一応フォワードの中での仲間なのに一緒に来ないなんて…」

「大丈夫よ。いざとなれば来てくれるんだから……ですよね？」

この人は…持ち上げて落とすのが結構上手いな。いくらが見ない内に汚い大人に染まり始めてるし。

「行ければ、だけどな。その分こっちでフォローするさ」

まいったな……言ってみたは良いけど、これはハードルを高くしすぎたかな。かといって、通常の搜索任務で全員空けてしまうのは避けないと。

「土産なんて考えるなよ？これは仕事だからな」

「副隊長…俺ってそんな意地汚い奴に見えますか？」

「見えないよね。すつごく誠実そうだし…」

フェイトさん、アナタって本当に十九歳ですか？とっても清纯な女性ってそうそういないですよ？他愛ない会話、というより俺への説得の中にまたも八神部隊長がこちらに来る。何か伝え忘れた事でもあるのかな？

「ああ、十六夜さん。ここにおったんかあ…探したわ。えつとな、連絡事項で「知ってます。地球への搜索任務ですよね？」……知ってるんか。だったら話が早い。十六夜さんも是非任務に加わって欲しいんやけど」

はい？でも六課を空けてしまう訳には…

「そこは大丈夫や。108部隊にも連携してもらって、有事の際には協力してもらうことになったんよ」

言い方は悪いけど……ゲンヤさん、俺を売ったんですか。いくら年下の部隊長でも上司。逆らったらいけないな。

「……了解しました。それでしたら任務に同行します」

これって、いいのかな？何か嫌な予感がするんだけど……まあ、シヤリオへの用件は明日にでも終わるって言ってたから良いけどね。

第3話 約束と、集結（後書き）

まだ戦闘がないって思ってたらしやる方もいるかもしれませんが、追々です。デバイスの設定に関してはまだ煮詰めないと納得いきませんので…

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第4話 集結と、力（前書き）

一話で終盤まで！と思いましたが、文才がありませんのでとりあえず分けて更新していきます。

では第4話、ご覧下さい。

第4話 集結と、力

第97管理外世界・地球、海鳴市

丁度高台のようになっていた別荘の庭に転送されてきた俺達出張メンバーは、その光景に目を奪われていた。故郷はここじゃないけど、こんなに綺麗な場所だなんて思っていなかったからだ。初めて見る景色にフォワードメンバーは既に旅行気分が変わってしまったている。

「気を引き締める。今は任務中だ」

俺の隣に居るシグナムさんが彼女達に湯を入れると同時に、一台の車がその庭に到着する。

中から出てきたのは、オレンジ色のショートカットと、紫のロングヘアの女性二人組。どうやらなのはさんと同年代のようだ。

「なのは!!」

「あ、アリサちゃん! ずずかちゃん!」

「アリサにずずか、元気だった?」

「もう元気も元気。あんたらも元気そうじゃないの。たまには連絡よこさないよね?」

「ゴメンゴメン、最近忙しくて」

「どう? 大学の方は」

「勉強が大変。でも、毎日楽しいよ」

あの二人がとても女の子してる……まあ、たまにはああいうのも良いかもしれないな。こっちは任務中だけど、ああいう会話ぐらいは邪魔しないほうが良いかも……

「貴方にもそれほどの器量があるのですね」

「シグナムさん……」

「はやてもそうだけど、あの二人も相当苦労してるんだ……たまにはああいう風になってもバチはあたらねえだろ？」

「そうですね……悪い気はしません」

「敬語は止して下さい。貴方は私達より階級が上なのです……」

「いや、それでも敬意は払わなきゃ。何せそっちが先輩なんですし」

っていうか、フォワード陣は目の前の光景に唯驚いている。念話の内容もこっちにただ漏れだよ？なんか、なのはさんが不憫に思えて仕方ない。管理局内にて『エース・オブ・エース』を知らない人間なんていないに等しい。けど、あんな一面があるのは絶対に知らないだろう。曰く、魔力の塊。曰く、悪魔の如き力の化身。女の子に黒い異名を与えるのはどうだろうか。

「っていうか、何か凄いメンツね……」

「あ、今日来たのはお仕事なんだ。いられるのは一日だけなの」

「ゴメンね、こっちに来れば遊べただけ……」

「良いの。二人の顔が見れるだけでも充分だよ……それである子達は？」

紫色の髪的女性がフォワード陣に視線を移すと、彼女等も姿勢を正す。そういえばこの人達って一般人だよな？

「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

「スバル・ナカジマです。初めまして」

「エリオ・モンディアルであります」

「キャラ・ル・ルシエといいます」

「よろしく、アタシはアリサ・バニングス。なのは達とは十年来の友達よ」

「月村すずかです、初めまして。よろしくね」

片手を上げて挨拶するバニングスさんとは逆に、丁寧にお辞儀する月村さん。性格が対照的だけど充分友達できてるようだ……喧嘩なんてした事があるのか？っていうぐらい。

「って、なのは……そっちの男の人って誰？」

「この人は私の補佐の」

「十六夜凱です。よろしく」

月村さんに倣って礼をすると、二人共俺の背の高さに驚いているようだ。だって、俺の肩までしか身長が無いんだから。

「でかつ」

「失礼だよ、アリサちゃん。でも、背高いですね」

「いや、成長期に骨折してからこんなに伸びたんだと」

事実、成長期に入った時から管理局にいるけど、訓練中に骨折して隊の皆に迷惑かけたっけ……しかもそれに拍車をかけるように牛乳飲み続けたらこうなった。髪に関しては、しょうがないでしょ？あまりにも忙しすぎて伸ばしっぱなしにしてるんだ。

「どんだけ伸びるのよ！？アタシだって成長したって胸ばっかりだし……」

そついう話題は女性同士にして下さい。

「まあまあ……凱さんは私達より一つ上だけど、結構出来た人だよ？ある意味尊敬したくなるくらい」

「煽て過ぎですよ、なのはさん。そんなに偉そうな事なんてしてません」

「むー、その敬語…何とかなりませんか？」

「え？」

いきなり話題変えましたね…そんなに変かな？

「おかしい、でしょうか？」

「飯にも階級は同じなんだし、しかも凱さんが年上でしょ？」

そりゃそうだけど、立場としてはそっちが上でしょ…いい加減減流されたくないの反論しようにもこっちは味方になってくれる人なんていないだろうなあ。完全アウェーだ。

「わかり……わかったよ、『なのは』」

「えっ？」

って、どういう事？何で驚くんだよ、そこで。

「駄目か？って、呼び捨ては良くないか……」

「い、いえいえ。でも、ちょっとビックリしました。良いですよ、呼び捨てでも…」

なら良いか。敬語止めるにしても呼び方も変えないと更に変だし。

そして、搜索範囲の確認を終えてそれぞれの隊で搜索開始。スライズ分隊とライトニング分隊が発見し、簡易本部に残った俺はもう手持ち無沙汰だ。シグナムの話によると、八神は向こうで打ち合わせがあるとかで合流が夕方頃になるらしい。ちなみにフェイト、シグナム、俺が簡易本部受け持ち。なのはとヴィータはそれぞれの分隊長として搜索班に。

「連絡が無いって事は、今のところ順調かな」

「そうだね。でもあんまり気は抜けないかも……対象は意思を持って移動してるから」

今回搜索するのは『ロストログア』に認定されているものだ。所有者からの話だと移動中に紛失したらしく、事件性は皆無らしい。けど、

「ここを通って、ってところに引っ掛かるな……」

「どういうことだ？」

「ここは管理局が定めた『管理外』の世界だろ？なのに運行スケジュールを見ても、此処に寄る事なんて記載されてないんだ」

「だとすると、通行する上で何かある・と？」

「確証は無いけどな。けど、そう取るしかないんじゃないか？」

案外モグリの運送業なのだろうけど、『ロストログア』を態々運送業者に頼むだろうか……そこまで危険視されているものを何で管理外世界に寄ってまで持っていく必要があるのだろうか。

考えを巡らせても仕方ない。サーチャーに引つ掛かる事だけは願っておこう。

S I D E O U T

S I D E O F フェイト

凱の考えには驚かされる。事件性が無いにしても、許可を得ていない場合での管理外世界への干渉は違法だ。それがバレるのを承知で来るのはおかしい……それだけの情報でそこまで推測できるなんて……執務官としては御見逸れしました。

「どうした？フェイト」

「あつ……ううん、何でもない」

後悔の上に更に後悔が……何だか居心地悪くなってきたかも。あ、そうだ。エリオとキャロは……

『エリオ、キャロ。聞こえる？』

『『はい』』

うん、よく聞こえる。その声の調子だと滞りは無いみたいだ。

『そつちの様子はどうか？何か変わった事は無い？』

『はい、大丈夫です』

『今のところは何も…』

『了解。それじゃあ、何かあったらすぐに通信するか、皆と合流してね』

『『了解です』』

ん、良いお返事。

S I D E O U T

S I D E O F 凱

搜索開始から一時間半。そろそろ配置は終わった頃かな。確かスタースはなのはで、ライトニングはウィータが付いてるんだっけ。

『各分隊長。状況報告、出来るか？』

『はい、こちらスタース。こっちは配置完了だよ』

『こちらライトニング。あと三箇所です。こっちは終わりだ』

まあ、あの子達の年齢と体格ならそれぐらい時間掛かるか。一般的に大人の歩く速度は平均して時速四キロ。子供でのデータはよく判らないけど、大人よりは遅いだろう。

『じゃあ、各分隊員へ。遅くなったけど一言。『任務』って堅苦しく考えずに『オリエンテーリング』って感じで、肩の力を抜いてくれ。ただし、作戦行動に入る場合は切り替えてな』

『『『『了解』』』』

私服での任務なんて潜入か、囷だからな。アレぐらいの歳の子には丁度良いだろうし、オリエンテーリングなら雑念無しで出来るだろう。

「いいのか？」

「何が？」

訝しげな表情のシグナムが腕を組んでこちらを睨んでくる。

「そんな簡単な考え方では任務にならんだろう」

「いや、これでいいんだ。あの子達はまだ感受性が高い……初めて見る光景に喜んでるんだよ。だったら堅い考えを解してやって、大事な場面では即座に切り替えられるように指示してるんだ」

あの子等の眼を見ればすぐに解った。あれじゃあ任務に集中できないだろうし、雑念だらけで行うのは上司としては反対だ。だったら

任務である事を強調するのではなく、敢えて『オリエンテーリング』だと思わせる事でその集中力を持続させることにしたんだ。

「それはそうだが……何か不安があるとでも？」

「深くは考えてないさ」

「ならば「俺も初めて来たけど、この景色は好きだな。こんな綺麗な所は今まで見た事がないからな」……こことは違う町の出身か？」

反論するのを抑えたのか、シグナムは違う話題を持ち出した。呆れてしまったんだろうか……ちょっと不安だな。

「ああ、こことは違うし……ビルとマンションばかりの息苦しい場所だったな」

「もう一つだけ聞かせる。お前は何故、魔法を使う事に決めたのだ？」

「何故って……」

まあ、考えてみればそうだな。特記事項にあるとはいえ、言うてはマズい事には変わりはないけど……

「敢えて言うなら、そうだな……誰にも負けない『勇氣』を、俺が持っていたから……かな」

「『勇氣』？」

「そう。俺は手放す事ができた『力』を、それを受け入れた。だけど、それだけじゃあ周りには単純だとか、流されているとか、そんな陰口ばかりの立場になっていただろうな……それでも、俺は『勇氣』を持って、前に進む事ができた。全部受け止めた上で、自分にできることをして行こう、って」

他からすればありきたりだろうけど、こちら側での『特別』ってのはちょっと怖い。下手をすれば見世物になったり、時には大衆から揶揄される。それを受け入れて、自分の信じたものの為に歩き続ける。現実では難しくても、言うだけは簡単だけど、やらなきゃ解らない。『やらなきゃ』じゃなくて、『やる』んだ。

「『勇氣』を持って進む、か……成程。流石は『勇者』だな」

「俺は『勇者』じゃないさ。『勇者』の意味って知ってるか？」

ありきたりな質問に面を喰らっているシグナムの表情がすぐに戻る。

「『英雄』、それに近い者ではないのか？」

やっぱりそう答えるよな。そういう固定概念になってるのってちょっと悲しい。それがあるから特別視されるんだろなあ。

「そうじゃない。『勇者』とは、言葉の通りだ」

「言葉の…?」

「『勇気ある者』だよ」

日も暮れかけている頃に八神と合流して、それとほぼ同じ頃に捜索チームが戻ってきた。フェイトはエリオとキヤロが無事なのに胸を撫で下ろし、ティアナとスバルは何だかぐったりとした表情だ。なのはに聞いてもよく解らないらしい。

「どうした？二人共」

「あ、十六夜さん。実は……」言わないで、スバル。もう何だか、女性としての自信を失くしそう」

「？どういうことだ？搜索中に何かと遭遇したんだろうか……兎に角、滞りなく終わって良かった。あとは餌に掛かるのを待っただけだな。それにしても、ハラ減ったな。」

「あ、それに関しては…私作るよ」

「「え？部隊長が、ですか？」」

「はやてのゴハンはギガうまだからな。食っておいて損は無えぞ」

へえ、思っていたよりは家庭的なんだな。楽しみだけど……頼む。コンニャクは入っていませんように！

第4話 集結と、力（後書き）

この出張任務についてはあと一回ほどを予定しております。

『勇者』の意味って人それぞれですが、私なりの答え方だと思っております。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第5話 力と、天国と地獄（前書き）

色々食い違う場所があるかもしれませんがご容赦下さい。

では第5話、ご覧下さい。

第5話 力と、天国と地獄

そして、月が顔を出した頃。

ささやかなで大騒ぎな夕食も終わり、皆でお風呂の時間。お手伝いで来ていた女性陣 - なのはのお姉さんや、フェイトの使い魔に義理のお姉さん - 達は帰宅しており、アリサにすずか、六課メンバーでスーパー銭湯へ。風呂は好きだけど、ここは初めてだな。来た事自体無いし。

「いらつしゃいませ。ようこ…団体様でございますか？」

「はい。大人11人に子供2人です」

「あれ？子供ってエリオにキャラ…だよね？」

「アタシは大人だ！！！」

何か言いたそうなスバルに思いつきり反論するヴィータ。そりゃそうだ、いつまでも子ども扱いしちやいけないぞ。

「おめえも、何か失礼な事考えてねえか？」

「いやいや、それは無いぞ！」

癪に障ったのか、凄い目つきで睨んでくるヴィータには負ける。それはもう、怖くて怖くて……

「え、エリオ……一緒に入らないの？」

ちよつと、フェイトさん。何か聞き捨てならない事を言いましたね？つと、注意書きに書いてあるな……11歳以下の子供はどちらでも入浴できます・か。それじゃあ、俺からは何も言えないな。エリオの意志で決めてもらおう。と言う訳で、

「お先に」

「ちよ、十六夜さん！！？」

皆の意見を待たず、さつさと男湯に入っていく俺に助けを求めるエリオだったが、すでに暖簾をくぐった後なのでもう無理。っていうよりは自分の意思をしつかり通すのも成長の証だよ？

「ふう、ちよつと熱いかな？でも気持ち良いな」

身体を一頻り洗い終わり、湯船に入る俺の耳には女湯からの喧騒が聞こえてくる。はつきり言っただ俺のメンタル面では言うに忍びない事ばかりだ。あゝ、近くのコンビニで耳栓買っておくんだっただ……

……今更後悔。

「酷いですよ、十六夜さん。僕を置いて行っちゃうなんて！！」

まるで酷い目に合ったように泣きそうなエリオ。そんなに嫌だったか？

「嫌ではないですけど……せめて助けけてくれても」「それは駄目だ」「ど、どうしてですか？」

「いいか？お前はまだ十歳だけど、もう赤ん坊じゃないんだ。おまえ自身で決めて、それを通して初めて人として成長できるんだよ。そこで助けても、成長した事にならない」

「それは……そうですね」

お説教に近い俺からの言葉に何も言えなくなる。言い過ぎたかな？とは思うけど、それは言わないでおく。冷たく突き放してこそ伸びるときもあるから。と、その時、キャロのプレスレッドであるデバイス『ケリユケイオン』が輝き出す。

「これは……サーチャーに感ありです。対象を発見しました！」

やっぱり、ここから出て来るか。

「楽しい時間はここでおしまい。皆、準備して」

「」「」「了解」「」「」

「凱も前線に出れる？」

「勿論。いつでも行けるぜ！」

よし、初お披露目だな。一応シャリオにはメモリ増設してもらったし、面倒は無いだろう。

「じゃあ、部隊長と副隊長達は官制を。フォワードは反応があった場所へ急行。隊長達も援護へ向かう」

「うん」

「解った」

配置は何とか指示できるが、前線では隊長達の指示を優先する。というよりサポートが役目なんだから、基本的にはフォワードメンバーと同じように扱ってくれて良いのに。

「私等は別荘に戻るわ。皆、気を付けてな」

「「「「「はい!」「」「」「」」」」」

十分後、同市・河川敷

バリアジャケットに身を包んだ皆と一緒に反応があつた場所に行つてみると、そこには無数のスライム状の生き物が犇めき合つていた。

「な、何よ？コレ」

「可愛い、です」

とりあえずキャラの可愛いの定義を追及するのは置いておいて。

「シヤマル！結界は？」

『すでに展開済みです。そこから1km圏内は戦闘可能よ』

「了解」

俺はといえば、まだデバイスを使っていない。機動隊にいる時から使っている隊長服に身を包んでいる。こちら用を用意できなかったのも理由だけど、この服が気に入っているのもそうだ。

「あれが対象か……結構な数だな」

「多分、あの中の一つが本体だろうね。捕まえてしまえばそれらも消えるでしょう……」

けど、何か動きがおかしい……何かを探しているような、そんな動き。

「今は捕まえるのを優先しましょう。スバル、エリオ。フロントはお願い。キャラは本体を特定して」

「うん」

「「わかりました」」

ティアナの指示で散開すると、エリオがライトウイングへ。スバルはレフトウイングへ展開してダミーを捕まえていく。

「ああいう機敏さは訓練の賜物かな…かなり動きが良い」

「凱さんが来るまではずっと戦闘訓練とそれぞれの動きを反復練習に回してましたから」

成程。しかし、ティアナの的確な指示には驚いたな。足を止めて指示をしているようだけど、自分の安全圏を把握した上で止まっている。ただ動き回っているんじゃないくて周りを見てバックアップに映っている。こりゃあビツクリだな。

「つと！本当に数にキリが無い……って何？」

動きを止めたティアナの視線を追いかけると、一体だけ赤く明滅している。多分アレが本体なんだろうな。そろそろ準備するか…と同時にティアナから鋭い声が飛ぶ。

「全員、避けて！！」

赤く明滅していた本体に向かってダミー全てが集まっていく。そして全て固まると一つの形を形成し始める。それは甲冑の様な形に右腕を槍に、左腕を盾。そして下半身は鳥の様な逆関節状に変わる。

「ちょっと！そんな情報聞いてないわよ！！？」

多分本体自身の防衛本能なんだろう。こりゃあ、落ち着いて指示出
来ないだろうな。それに……

「なのは、フェイト。フォワード達を下がらせてくれ」

「「え？」」

ポケットから逆三角形のペンダントを取り出すと、思いつきりに
放り上げる。それを追いかけるように飛び上がると、デバイスを立
ち上げる。

「『イク・イップ』！！！」

S I D E O U T

S I D E O F なのは

「なのは、フェイト。フォワード達を下がらせてくれ」

「「え？」」

いきなりの事に頭が回っていないのに、更に横からの指示でパニッ

クになりそう。でも、凱さんは妙に落ち着いている。まるでこれを想定していたかのような。彼の手には緑色のペンダントが握られていて、多分アレがデバイスの待機状態なんだろう、というのはかるうじて解った。

そして、ペンダントを上に取り上げると同時に飛び上がると、

「『イク・イップ』……！」

何だろう……ペンダントから光と共に何かのパーツが彼の周りを飛び回り、そして装着される。その姿を見た瞬間、感動するほどの凛々しい姿にフェイトちゃんも私も驚いていた。

金色の装甲に両手には宝玉がはめ込まれたリング。そして……何で膝にドリル！？脛は甲冑により守られ、そして頭にはシオルダーアイマーと同じぐらいの長さがある角。そしてスカウターを展開すると、彼は緑色の光に包まれる。多分、展開が終わったんだろうな……髪は上にあげられ、ライオンみたいな感じだね。

「フオワードメンバー！全員結界ギリギリまで後退しろ……！」

そういった彼の左腕には手首から先を覆い隠すほどの剣が装備されている。剣、というよりは何かの工具の様な……何処かで見た事があるんだけど……何だっけ？

S I D E O U T

S I D E O F 凱

よし、無事に展開完了。久しぶりだな、『エヴォリユダー』。そして俺の相棒。

さて、状況確認。現在対象は攻撃態勢。防衛本能で動いてるんだろ
うけど動き一つ一つに無駄が無い。恐らくプログラムどおりに動い
てるんだろつな。だったら不確定要素でも作るとするか。

「『エヴォリユダー』、『デイバイディング・ドライバー』をキ
ットナンバー03で展開」

《Roger》

粒子から展開されたそれはオレンジ色のアタッチメントに剣の様な
マイナスドライバーが取り付けられている。これなら充分闘える。

「フォワードメンバー、全員結界ギリギリまで後退しろ!!!」

効果範囲計算開始。アレスティングフィールド形成準備。デイベイ
ディングコア生成まで12秒。これなら!!

「『デイベイディング……ドライバアアアアア』!!!」

結界の端から100mほど離れた場所にそれを突き立てると同時に
七つのポインターが徐々にエネルギーを打ち込んでいき、サスペン
スが熱を強制排出したあと、驚異的なスピードでエネルギーが地面
を一直線に走っていく。その直後、轟音と共に地面が……割れてい
った。

「……えええええええええつ！！！！？」

《アレスティングフィールド固定。ディバイディングコア消失。
ディバイディングフィールド形成完了》

半径200mつてところか。形成半径を自動計算する上に形成処理もデバイス側が全部コントロールしてくれる。シャリオの奴、良い仕事してくれるぜ。これなら思う存分暴れられる。

「よし！！」

「よし、じゃないです！！こんな馬鹿げたこととして……周りがタダで済むはずが無いでしょ！！」

「大丈夫だよ」

「なのはさん……」

「アレが噂の……『ディバイディング・ドライバー』だね」

それほど自慢できる物でもないし、便利でもない。何せフィールド固定時間にも制限がある上に、磁場が不安定な場所では使えない。壊したくない所がそういう場所だったら、と思うと逆にコッチが不利になる。まあ、開発局に無理言って造ってもらった甲斐があるな。

「さあ、行け！！」

もう向こうは臨戦態勢に入っている。それより気になるのは……奴の体の中にある幾つかの残骸の様な塊だ。あんなの何処から……細かい事は後回しだ。

「おおおおおおおおおつ!!!」

俺の放った拳と奴の盾がぶつかり、衝撃波が発生する。かなり堅いな……硬質化した上で圧力計算もしたのか。あの一瞬で。

そんな冷静な分析とは裏腹に、徐々に押され始める。やはり純粹なパワーでは向こうが上か。

「くそっ!!これでは……ああああああああつ!!」

魔力を全開にして押し返そうとするが、それでも拮抗する。駄目か……なら!

「ふっ!!」

奴のパワーを使って、後ろに飛ぶと腹部の脇にあるクリスタルから黄色いリング、ファントムリングを生成し、正拳突き of 構えを取る。そして、右手首にある三つの宝玉から熱を生み出し、回転を加える。右腕全体が赤熱化すると同時にリングに向かって拳を放つ。

「『ブロウクン……ファントオオオム』っ!!!」

回転エネルギーがリングと共に放たれると盾そのものが吹き飛ぶ。おかしい……パワーは抑えたはずなのに、何故?その疑問は俺の足元に転がってきた残骸のお陰で解消された。

「っ!!!……これは」

そこには、カセットコンロで使われるガス缶だ。やはり……奴は。

「よし……それならー!」

あれだけの強固さなら……そしてこのフィールド内だったら、使える
!!!!

「『ヘル・アンド・ヘヴン』……!」

大きく広げたそれぞれの腕に攻撃エネルギーと防御エネルギーを
解放。すると、デバイス内にある緑の宝石が臨界点を示すかのよう
に光を放ち始める。そして、そのエネルギーを解放した両腕を組み
合わせる。

「『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ』……むんっ!!!!」

反発する両腕を無理矢理押さえ込んで両手で拳を作ると、緑色の竜巻が相手の動きを止める。磔のように捕まった相手はもう動く事は不可能。この竜巻の中では何物も無力。

「おおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!」

背中から光の翼を展開するとそのまま突進。地面を叩き割りながらの突進でもスピード自体は車と同じくらいだろう。そして両手で作られた拳が奴の身体に打ち込まれた瞬間、頭部と両手は弾け飛び、竜巻も収まる。拳は胸部にめり込んでおり、中にある本体を掴んでいる。

「っ!!!!!!!!!!……うおおおおおおおっ!!!!!!!!!!てえありやああああああああっ!!!!!!!!!!」

中で繋がっていたハイプや固定されていた縄すらも引き千切り、大きくその両手を掲げたと同時に、残っていたパーツ全てを包み込むほどの爆発が起こる。

S I D E O U T

S I D E O F ティアナ

何……アレ?あんな攻撃の仕方があるなんて。しかもタダの攻撃

じゃない…… 本体を強引に抜き取って終わりにするなんて反則でしょ！？っていうか、あの竜巻の中で何があったの？

なんて疑問はすぐに無くなった。だって、目の前まで爆発が広がってるんだもん。被害失くす為のこのフィールドだったの！？あの熱量じゃ被害が甚大過ぎる。

（やっぱり、私だけ……か）

その爆発の中から出てきた十六夜さんの顔は何故か晴れやかではなかったのは、私には解らなかった。

第5話 力と、天国と地獄（後書き）

一気にヘルアンドヘヴンまで出してみました。

ほぼ殴り書きで申し訳ありません。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8977y/>

Magical Girl Lyrical Nanoha StrikerS [全てを撃ち抜く者]

2011年12月7日01時55分発行